

上谷地c遺跡発掘調査報告書

1995

山形県教育委員会

上谷地c遺跡発掘調査報告書

平成7年3月

山形県教育委員会

序

本書は、山形県教育委員会が平成6年度に実施した県立米沢工業高等学校移転整備事業に伴う「上谷地c遺跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

上谷地c遺跡は山形県教育委員会が実施した試掘調査によって平成6年度に新たに発見された遺跡で、平成6年度後半の建設着工予定となっていたため、急遽、記録保存のための発掘調査を実施することになったものです。

発掘調査では、奈良時代の堅穴住居跡や、室町時代の掘立柱建物跡等が発見されました。特に、伊達の支配下であった当地においては、おびただしい数の中世城館址の存在が知られているものの、中世集落については不明な点が多いという問題がありました。今回、伝承もない廃絶した中世集落の様相が一部とはいえ明らかになった意義は大きいものがあると言えます。

さて、埋蔵文化財は土地に密着した文化遺産で、私たちの祖先の歴史を語るかけがえのない財産です。これらを保護し未来へ継承していくことは、現代に生きる私たちの重要な責務と考えます。

山形県教育委員会では、今後とも、このような観点で文化財の保存と活用を推進してゆく所存です。

最後になりましたが、調査に御協力頂きました米沢市教育委員会と関係各機関、炎天下のなかでお手伝い頂きました皆様に心から感謝申し上げると共に、本書が研究と、埋蔵文化財の保護・普及の一助となれば幸いです。

平成7年3月

山形県教育委員会

教育長 佐藤 進

例　　言

- 1 本書は山形県教育委員会が平成6年度に実施した山形県立米沢工業高等学校移転整備事業に係る「上谷地C遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成7年7月12日から同年7月27日までの延べ12日間行った。
- 3 遺跡の所在地は山形県米沢市大字上谷地2,036番地他である。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当者 渋谷孝雄（山形県教育庁文化財課埋蔵文化財係長）

- 5 発掘調査にあたっては米沢市教育委員会、教育庁総務課など関係機関の御協力を得た。
- 6 本書の作成と編集は渋谷孝雄が担当した。
- 7 現地調査と報告書の作成にあたり、手塚孝、菊地政信、月山隆弘、伊藤邦弘の各氏にご指導とご助言を賜わった。記して感謝申し上げる。
- 8 第1図に使用した地図は国土地理院発行の2万5千分の1「糠野目」「米沢東部」である。

凡　　例

- 1 本書で使用した分類記号は下記のとおりである。
S T…竪穴住居跡、S B…掘立柱建物跡、S K…土壤、S D…溝状遺構
E B…建物跡の掘り方、E P…竪穴住居跡の柱穴、E K…竪穴住居跡の附属土壤
S P…組合せ不明の掘り方
- 2 掘図中の方位は真北を示している。遺構図の断面図におけるレベルは、建築工事の基準レベルからのマイナスで表示した。遺構の掘図縮尺は1/40を基本とし、各々にスケールを示した。遺物の実測図と図版内の遺物の縮尺は1/3とした。

目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の立地.....	1
2 歴史的環境.....	1
III 発掘調査の経過.....	3
IV 遺跡の概観	
1 層序.....	3
2 遺構と遺物の分布.....	3
V 遺構と遺物	
1 奈良時代の堅穴住居跡と遺物.....	7
2 中世の遺構と遺物.....	10
VI まとめ	
1 奈良時代、平安時代.....	21
2 中世.....	21

挿図目次

第1図 遺跡位置・分布図.....	2
第2図 グリッド配置図.....	4
第3図 基本層序.....	5
第4図 第1調査区遺構分布図.....	5
第5図 第2調査区遺構分布図.....	6
第6図 ST2平面・断面図	7
第7図 ST3平面・断面図	8
第8図 ST2、3出土遺物	9
第9図 SB6、7平面・断面図	11
第10図 SB8平面・断面図	13
第11図 SB9平面・断面図	14
第12図 SB10平面・断面図	15
第13図 SB11平面・断面図	16
第14図 SB12平面・断面図	17
第15図 SB13平面・断面図	18
第16図 SD4断面図	19
第17図 中世の遺物、縄文土器.....	19

図版目次

- 図版1 第1調査区調査状況 第2調査区調査前状況
図版2 ST2完掘 ST3完掘
図版3 ST2、3検出状況 ST2検出状況 ST3検出状況他
図版4 ST3土層断面 ST3カマド断面 ST2床面検出状況他
図版5 ST2、3完掘
図版6 第1調査区中世掘り方群
図版7 第2調査区中世掘り方群
図版8 SB6EB34土層断面 SB6EB35完掘 SB6EB36完掘他
図版9 SB7EB57土層断面 SB7EB59土層断面 SB8EB37土層断面他
図版10 SB8EB41完掘 SB8EB66土層断面 SB9EB42土層断面他
図版11 SB9EB44完掘 SB9EB60土層断面 SB10EB71土層断面他
図版12 SB10EB48土層断面 SB10EB48完掘 SB12EB15土層断面他
図版13 SB12EB17土層断面 SB12EB17完掘 SB12EB18土層断面他
図版14 SP22完掘 SP23完掘 SP25完掘 SP27石臼出土状況他
図版15 SD4土層断面 SD4完掘 SD4漆器出土状況 基本層序他
図版16 出土遺物

附表目次

- 表-1 出土遺物一覧表 20

I 調査に至る経過

平成5年12月16日、教育庁文化課では県立米沢工業高等学校の移転整備事業に伴い、教育庁総務課の依頼を受けて登録遺跡の上谷地b遺跡の隣接地の試掘調査を行ったところ、遺跡の主体部から離れているものの、縄文時代晩期の土器や石器を含む層が敷地内に延びていることを確認した(山形県教委1994)。幸い、この部分については単純盛り土で遺跡の現状保存が図られることとなったが、敷地面積が広大で、未発見の遺跡が所在する可能性があったため、追加の試掘調査が必要であるとの判断がなされ、教育庁総務課にもその旨を報告したが、積雪のため、平成5年度の調査を断念せざるを得なかった。

しかし、平成6年度の建築工事発注のためには、用地造成を急ぐ必要があったため、盛り土工は冬季間に実施することもやむなしと判断され、新年度に建物の建設予定地の試掘調査を盛り土の上から実施し、もし、埋蔵文化財が発見された場合には、記録保存等の保護措置をとることで協議を進めた。

追加の試掘調査は、建物建設予定地を中心にグランド予定地等、昨年の調査で未調査となっていた地区を対象として、教育庁文化財課が平成6年6月2・3の両日に実施した。

この結果、建設系棟、マテリアル棟の西側で中世の所産とみられる掘り方群が検出され、土師器や摩滅した縄文土器が數片出土した。文化財課では、新発見の遺跡を「上谷地c遺跡」と命名し、ただちに教育庁総務課と保存協議に入った。この結果、事前の協議のとおり、建物の建設で破壊されることになる部分について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになったものである。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

上谷地c遺跡はJR奥羽本線米沢駅の東北東1.5kmに位置し、標高244mの羽黒川左岸の自然堤防上に立地する。東に隣接する上谷地b遺跡は一段高い段丘上にあり、上谷地b、上谷地c遺跡間は後背湿地と考えられ、試掘調査でも地山が低くなっていく様相が窺えた。上谷地b遺跡の段丘は水の便が悪く、八幡原工業団地が造成されるまでは一部宅地、畠地となっているものの、その大半は広大な原野となっていたが、上谷地c遺跡周辺は早くから水田地帯となっていた。

2 歴史的環境

米沢市は400箇所を超える遺跡の存在が知られている。その中でも八幡原周辺は屈指の遺跡密集地域となっており、第1図の図幅だけでも45箇所の遺跡が確認されている。縄文時代早期から中世まで各時代の遺跡があり、狩猟・採集を基盤としていた時代から稻作を中心とする生産基盤を持つ社会を通じて、当地域が一貫して利用され続けてきたことを示しており、昭和49年から始められた八幡原工業団地造成と関連事業に伴う発掘調査によって裏付けられてきている。なかでも昭和49~51年に調査された清水北c(17)、八幡原a(15)、



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	上谷地 c	縄文～中世	16	八幡原 b	縄文	31	中谷地北塚	中世
2	上谷地 b	縄文	17	清水北 c	縄文～平安	32	中谷地 b	奈良～中世
3	上谷地 a	縄文	18	焼山下	縄文	33	中谷地 a	奈良～平安
4	比丘尼平	縄文～中世	19	竹井境 c	中世	34	中の目	奈良～中世
5	比丘尼平廐寺	中世	20	竹井境 b	縄文～平安	35	館山館	中世
6	堂森山塚 a	中世	21	竹井境 a	縄文～平安	36	羽黒神社城館跡	中世
7	山影	縄文	22	玉ノ木 b	奈良～平安	37	上野	奈良
8	慶治清水 a	縄文	23	竹井	縄文～平安	38	元立	奈良～平安
9	慶治清水 b	縄文	24	沼田土壙	中世	39	龜上 a	奈良～平安
10	慶治清水 c	縄文	25	玉ノ木 a	奈良～平安	40	龜上 b	奈良～平安
11	清水北 a	縄文	26	東屋敷	奈良～中世	41	西谷地 b	奈良～平安
12	清水北 b	縄文	27	野際	中世	42	西谷地 a	奈良～平安
13	清水北 d	縄文・弥生	28	野際	縄文	43	八木橋 b	縄文・中世
14	八幡原 c	縄文・平安	29	古峰神社館	中世	44	台坂	縄文
15	八幡原 a	縄文	30	中谷地南塚	中世	45	下花沢 a	縄文

第1図 遺跡位置・分布図 (S = 1 : 25,000)

竹井境 a (21)、b (20) 遺跡の調査で縄文時代早期～晩期の各期、弥生時代中期と奈良～平安時代の長期間に渡る豊富な遺構、遺物が検出された（手塚他1975、76、77）。

昭和53年に調査が行われた比丘尼平遺跡(4)では県内で初めて古墳時代前期の方形周溝墓が発見されたほか、縄文時代前期、中期、後期、古墳時代前期、奈良、平安中世の各時代にまたがる大規模な集落跡であることが明かとなっている（手塚他1988）。

隣接する上谷地 b 遺跡(2)の台地下北側の水田部では、昭和60年に地権者の排水路工事で縄文時代晩期の丸木弓が出土している（手塚1985）。

羽黒川右岸の自然堤防上の遺跡群は奈良時代～中世の集落跡となっている。

III 発掘調査の経過

発掘調査は平成6年7月12日から平成6年7月27日まで延べ12日間実施した。開始日が梅雨明け宣言の日となったこともあって、全日好天に恵まれ、予想以上の遺構が検出されたにもかかわらず予定通りの日程で終了した。調査面積は第1調査区728m²、第2調査区が675m²で合計1,403m²となった（第2図）。以下にその経過を示す。

7月12～15日

発掘器材の搬入。バックホー2台で表土の除去を始め、12・13日で第1調査区、14・15日で第2調査区が終了。表土除去が終ったところから区割りの杭打ち作業と遺構検出のための面整理作業に入り、第1調査区の北部と第2調査区の南部で中世の所産と考えられる掘り方群が多数検出され、第2調査区ではカマドを持つ竪穴住居跡2棟も検出された。

7月18～22日

18日までに遺構検出作業が終了し、19日から竪穴住居跡の精査に入る。21日までに竪穴住居跡の精査と記録が終了。竪穴住居跡の精査と並行して掘り方群の平面実測を行い、一部半戻して掘り下げに入った。SD4も掘り下げを開始し、底面から天目茶碗や漆器椀、曲物の底部等が出土した。

7月25～27日

第1、第2調査区の掘り方群の半戻を続行し、登録、断面図作成の終わったものから完掘作業に入り、27日までに精査が終了した。SD4の掘り下げも26日までに終了した。これらの作業と並行して平面実測を行い27日までにすべての作業が終了した。

IV 遺跡の概観

1 層序（第3図 図版15）

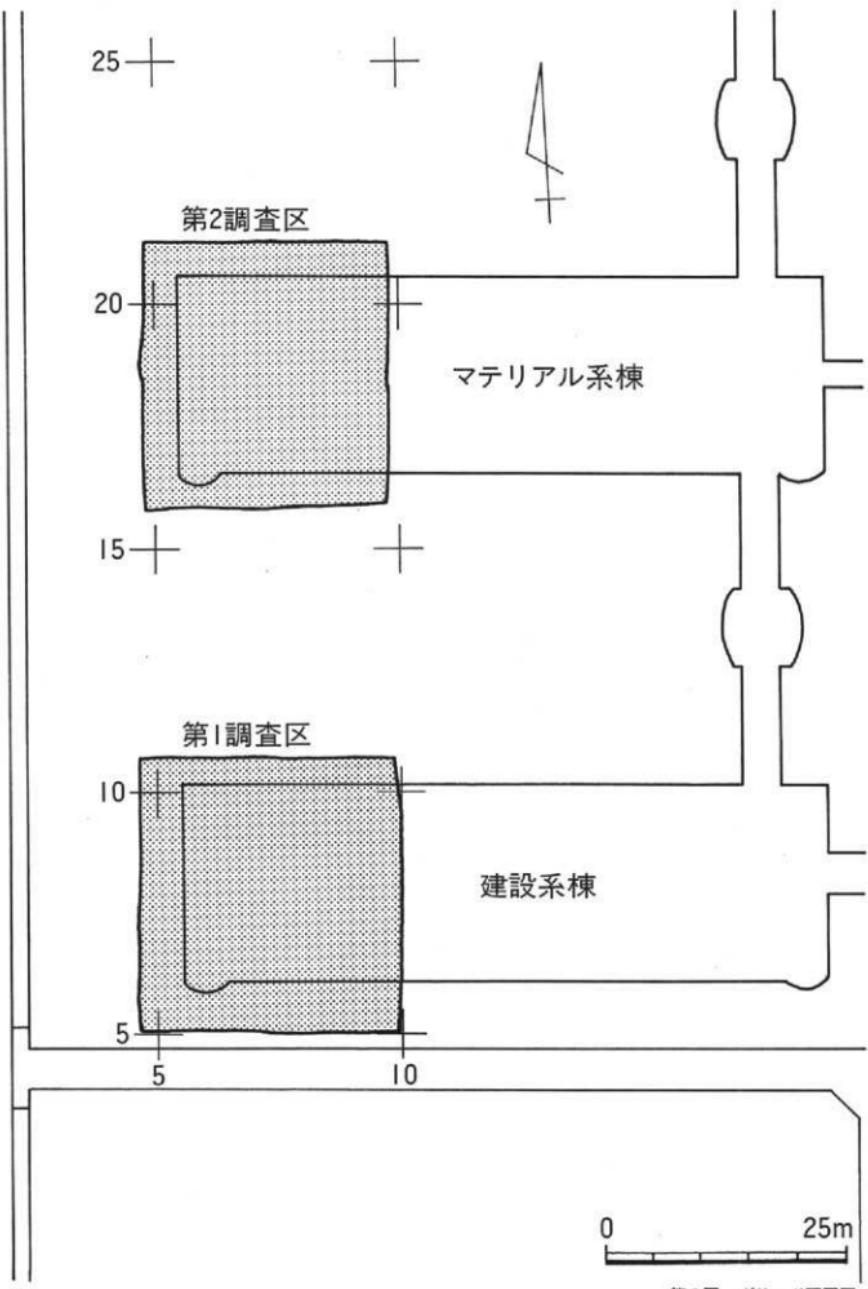
遺跡部分は試掘調査前に造成工事がほぼ終了していたため、発掘調査に際しては盛土部分の除去を工事のなかで実施し、発掘調査は旧表土からとした。第1調査区、第2調査区とも水田耕作土であるI層の下位に古代や中世の遺物を若干含むII層が続き、III層である灰褐色シルトが中世及び古代の遺構の地山となっている。また、III層には原位置をとどめない縄文時代晩期の遺物が含まれており、III層の形成時期は縄文時代晩期以降から古代までと考えられる。

2 遺構と遺物の分布

(1) 第1調査区（第4図）

第1調査区では中世の掘立柱建物跡6棟と、これを構成する掘り方などを現地で43基、整理作業中に19基の合計62基を登録した。

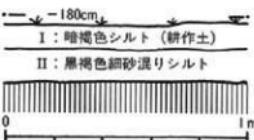
これらは調査区北部に集中しており、調査区南部には中世以前と考えられる遺構は確認できなかった。4～9・5・6区にある約幅5mの溝跡は、層に20cmほど食い込む近代の埋跡であり、この埋跡の南にあるピット群も浅く新しい時期の所産とみられる。



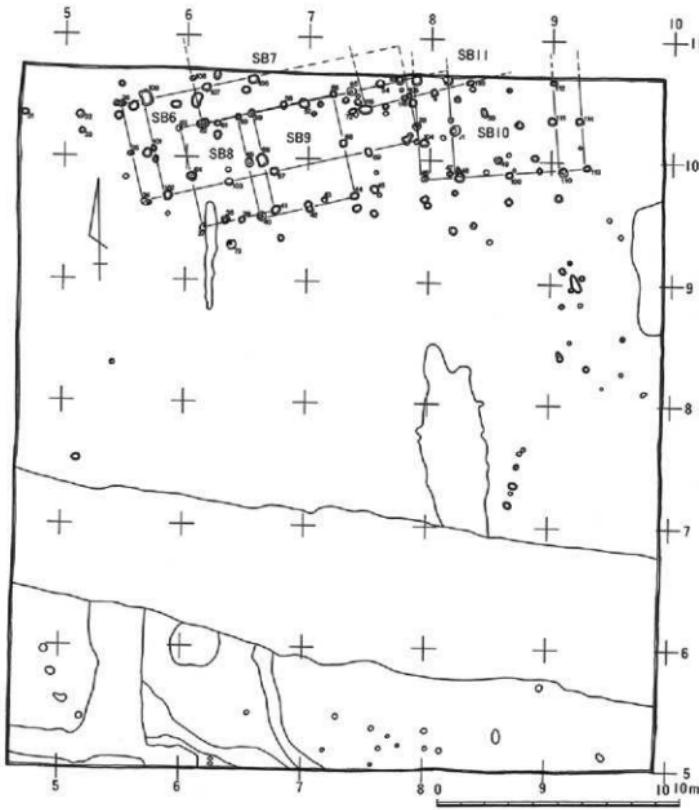
調査区北部に集中する掘り方群は東北東－西南西の方向性をもつ数本の柱列との認識も可能であり（図版6）、組合せの不明な掘り方も多い。

この中でS P31～33は堆積土が黒色シルトであり、他の掘り方群との異質性を指摘でき、奈良～平安時代のピットである可能性が高い。

遺物は、遺構検出作業ではII層から土師器壺の破片や須恵器壺の体部破片、糸切りの底部破片が合わせて4点出土するにとどまり、ピットや掘り方から出土した遺物も古代、中世を合わせ18点と極めて少なかった。



第3図 基本層序



第4図 第1調査区遺構分布図

(2) 第2調査区 (第5図)

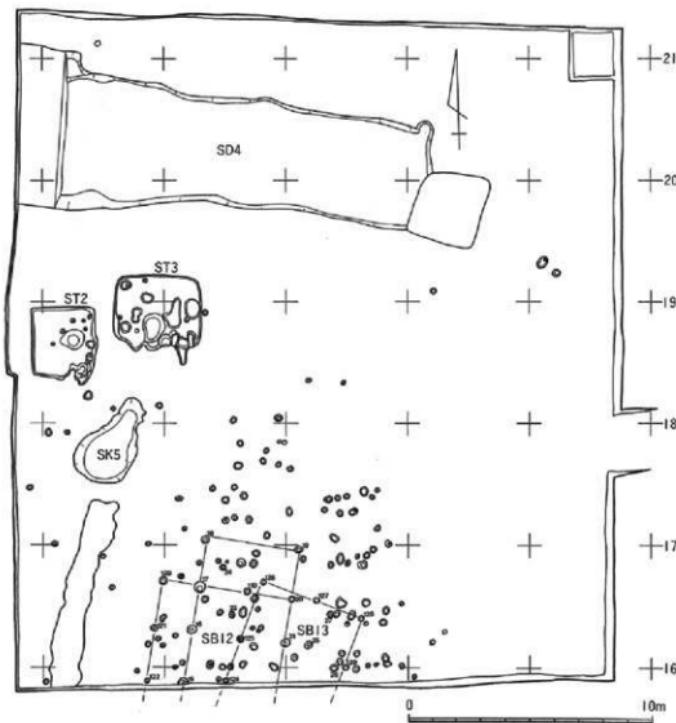
第2調査区は、第1調査区の北方約30mに位置する。登録した遺構は、奈良時代の竪穴住居跡2棟、土壙1基、中世の掘立柱建物跡2棟、溝跡1条と掘立柱建物跡を構成する掘り方群のうち、現場登録16基、整理段階の登録は9基を数える。

奈良時代の遺構は調査区の中央西寄りの4～6-18～19区にあり、竪穴住居跡2棟は近接する。土壙は、竪穴住居跡の南に所在する。

中世の遺構は、調査区の南半に掘立柱建物跡と掘り方群が集中し、掘り方群の北端から10mの位置に東西に走る中世の溝であるSD4がある。

遺物は奈良時代の土師器や須恵器がST2、3の竪穴住居跡とSK5とその周辺のII層から出土し、中世の遺物はSD4とSP27から出土した。また、縄文土器が6-20区を中心とする地区のIII層から出土している。

5 + 6 + 7 + 8 + 9 + 10 22



第5図 第2調査区遺構分布図

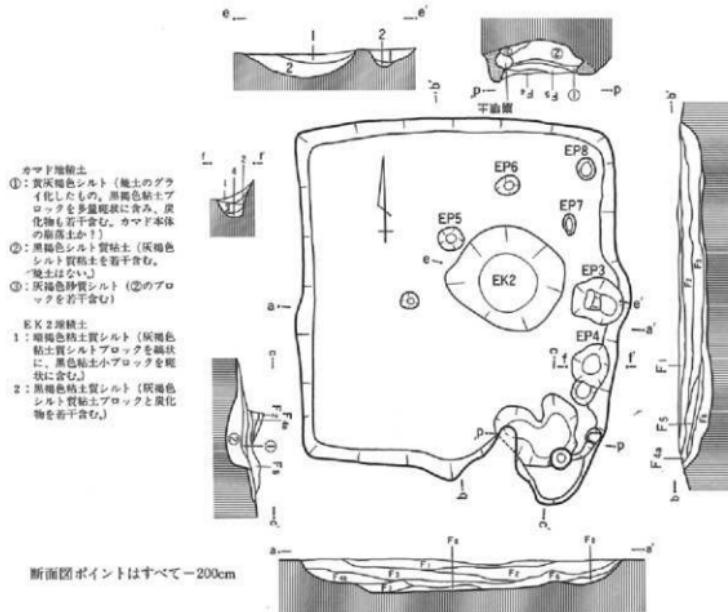
V 遺構と遺物

1 奈良時代の竪穴住居跡と遺物

S T 2 (第6図、第8図 図版2~5、16)

第2調査区の4・5-18区で検出した。東辺260cm、西辺268cm、南辺240cm、北辺260cmの小規模な竪穴住居跡で確認面から床面までの深さは22~28cmを測る。主軸はN-2°-Eとほぼ磁北にのる。堆積土はF1~F8までの合わせて9層に分けられ、F1・2から86点、F3から52点の土師器、須恵器が出土した。

南辺の東端にカマドがあり、焚き口部は床面から10cm程掘り下げられており、焚き口部の南端に伏せた土師器の甕が配置されていた。カマドの堆積土は3層に分けられ、①層は



EP 3 地盤土
 1 : 黑褐色シルト（灰褐色シルトブロックを落葉リ状に含む。）
 2 : 灰褐色砂質シルト（灰褐色シルトブロックを含む。）

EP 4 地盤土
 1 : EP 3 の1と同じ。
 2 : EP 3 の2と同じ。
 3 : 黑褐色シルト質粘土（灰化物含むがほぼ純粋。）
 4 : EP 3 の2と同じ。

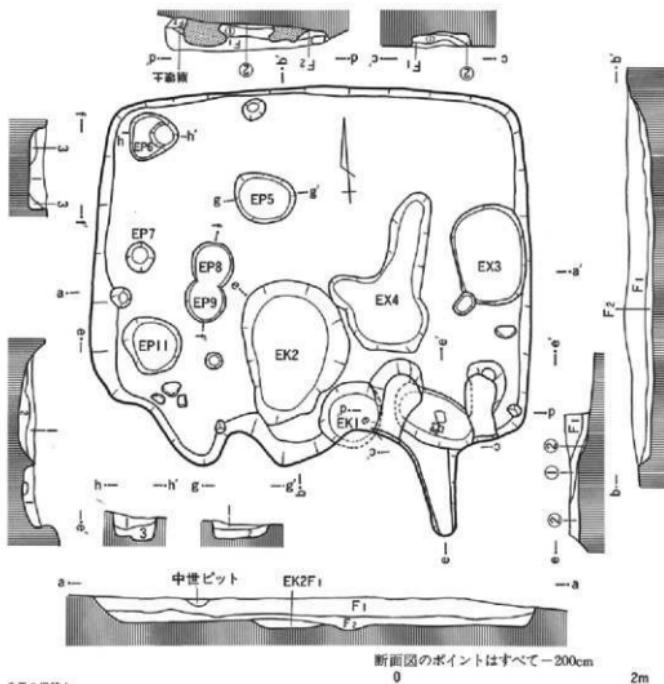
EP 5、6、7、8 地盤土
 灰褐色+黒褐色シルト質粘土（灰褐色砂質シルトを斑状に含む。）

第6図 ST2平面・断面図

グライ化した焼土である。カマドの堆積土から9点の土師器片が出土した。

床面で、附属する土壤1基と7基の小ビットが検出された。EK2は床面中央東寄りにあり、径90cm前後の不整円形で底面中央から緩やかな立ち上がりを見せており。堆積土は2層に分けられ、1点の土師器片が出土した。ビットは、EP3、4が確認面から15cmの深さをもつが、他は浅い。ビットからの遺物の出土はない。

第8図1は土師器の坏である。破片であるため若干の誤差があると考えられるが、口径138mm、底径98mm、器高34mmで体部下端に回転ヘラケズリが施され、内面は丁寧なミガキの



5 T 3 堆積土

F1：暗褐色粘土質シルト（径30cmの大底褐色シルト粒と炭化物を含む。）
F2：底褐色粘土質粘土（底褐色シルト。灰白色粘土。黒色シルトの大ブロックと、炭化物を含む。）

カマド堆積土

①：灰褐色シルト（底上のグライ化したもの。F1のブロックと炭化物を含む。軟らかい。）
②：暗褐色粘土質シルト（発土ブロックと炭化物を若干含む。）
本体：灰褐色シルト。（底褐色シルト質粘土を斑状に叩き占めており、硬い）

E K 1 堆積土

1：暗褐色シルト質粘土（底土粒、炭化物を多量含む。軟らかい。）

E K 2 堆積土

1：黒褐色シルト質粘土（暗褐色粘土質シルトのブロックを斑状に含み、炭化物が付着する。炭化物を若干含む。）

2：黑色シルト質粘土（暗褐色粘土質シルト。淡青灰色細砂（堆山）のブロックを斑状に含む。）

E K 3 堆積土

暗褐色シルト、黒褐色粘土質シルト、灰褐色砂質シルトが斑状に混じり合つ。）

E K 4 堆積土

E X 3 の堆積土に灰白色粘土のブロックを斑状に含む。

E P 5 , 6 , 8 , 9 堆積土

1：暗褐色粘土質シルト（灰褐色粘土質シルトの大ブロックを斑状に含む。）
2：炭化物を若干含む。）

E P 7 , 11 堆積土

暗褐色シルト質粘土、暗褐色シルト、暗褐色シルトの三者が混じり合つ、炭化物を若干含む。）

第7図 ST3平面・断面図

後黒色処理が施されている。他の土師器壺の底部破片はすべて平底の全面ケズリとなっており、本資料も同様であろう。2はカマドから伏せられた状態で出土した土師器の壺で体部下半から底部にかけての資料である。底径100mm、体部径164mmを測り外面には縦方向の浅いハケメが、内面には横方向の深いハケメが観察される。

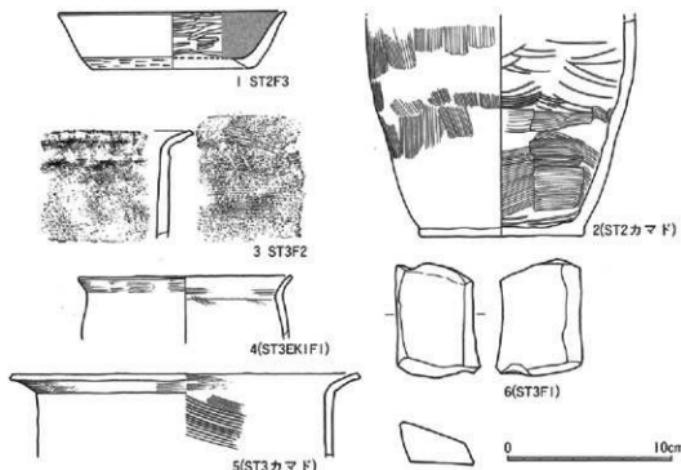
S T 3 (第7・8図 図版2~5、16)

第2調査区の5・6・18・19区で検出した。東辺265cm、西辺238cm、南辺340cm、北辺322cmの長方形の堅穴住居跡で確認面から床面までの深さは13~23cmを測る。主軸はほぼ磁北にのる。堆積土は2層に分けられ、F1から13点、F3から33点の土師器、須恵器と砥石1点が出土した。

南辺東端に煙道を伴うカマドがあり、袖も残存していた。これとは別に南辺西寄りにも煙道のないカマドの痕跡が認められ、カマドの作り替えがあったことを窺わせる。焚き口部は若干の掘り込みがあるが顕著ではない。カマドの堆積土は2層に分かれ、焚き口部の底面で土師器壺の破片が33点、須恵器壺の破片が1点出土した。

床面で附属する土壤2基、落込み3基、ピット6基が検出された。EK2は長径120cm、短径85cmの不整梢円形のプランをもち、確認面からの深さは21cmを測る。堆積土は2層に分かれ、12点の土師器壺の破片が出土した。EK2は径50cmの円形プランで住居跡の壁寄りで一部袋状の立ち上がりとなっている。落込みとピットの深さはEP6が20cmとなっているが、他はいずれも10cm前後と浅い。

第8図3は口縁部が強く外反し、頸部に沈線をもつ土師器の壺で、体部内・外面にハケメが認められる。4は口径130mmの小形の壺である。5は口径210mmの壺で口径部外面はヨコナデ、内面にはハケメが観察される。6は砥石で4面が砥磨面となっている。



第8図 ST2・3出土遺物

2 中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

S B 6 (第9図 図版6、8)

第1調査区の5~7・9・10区内で検出した。桁行4間、梁行2間の東西棟で西面に廂をもち、主軸方向はN-11°-Wとなっている。S B 7、8、9、10、11の各掘立柱建物跡と重複しているが、前後関係は明確でない。北東部は調査区外へと延びており、一部不明な点があるが建物の規模は東西11.5m、南北4mで、南面掘り方列と北面掘り方列はよく対応している。桁行の柱間距離はE B 102・103間が260cm、103・67間が200cm、67・69間が390cm、69・104間が220cmを測る。梁行の柱間距離は200cm等間となっており、西面掘り方列から廂までの距離は90cmとなっている。

掘り方の規模は一定していないが、30~40cmの隅丸方形ないしは不整円形のプランをもち、アクリ部分が一段深くなっているものが多い。

掘り方の深さは最浅32cm、最深55cmまで存在するが40~50cmのものが多い。掘り方の堆積土はれも軟らかく乾燥すると地山と隙間を生じる。

E B 67から板の断片が出土したが、土器や陶器等の遺物の出土はない。

S B 7 (第9図 図版6、8、9)

第1調査区の5~8~10区で検出した。建物の南西部を確認しただけでその規模は不明だが、桁行4間以上、梁行2間の東西棟になるものと考えられる。主軸方向はN-12°-WでS B 6とほぼ同じ向きとなっている。S B 6、8、9、10と重複し、桁行が4間以上になる場合にはS B 11とも重複する。このうち、S B 8と掘り方(E B 59a、b)の重複があり、S B 6が古いことが明かとなったが、それ以外の前後関係は捉えていない。

桁行の柱間距離はE B 62・59a間が200cm、59a・57間が210cm、57・55間が205cm、55・53間が205cm、梁行の柱間距離はE B 69・109間で195cmとなっている。

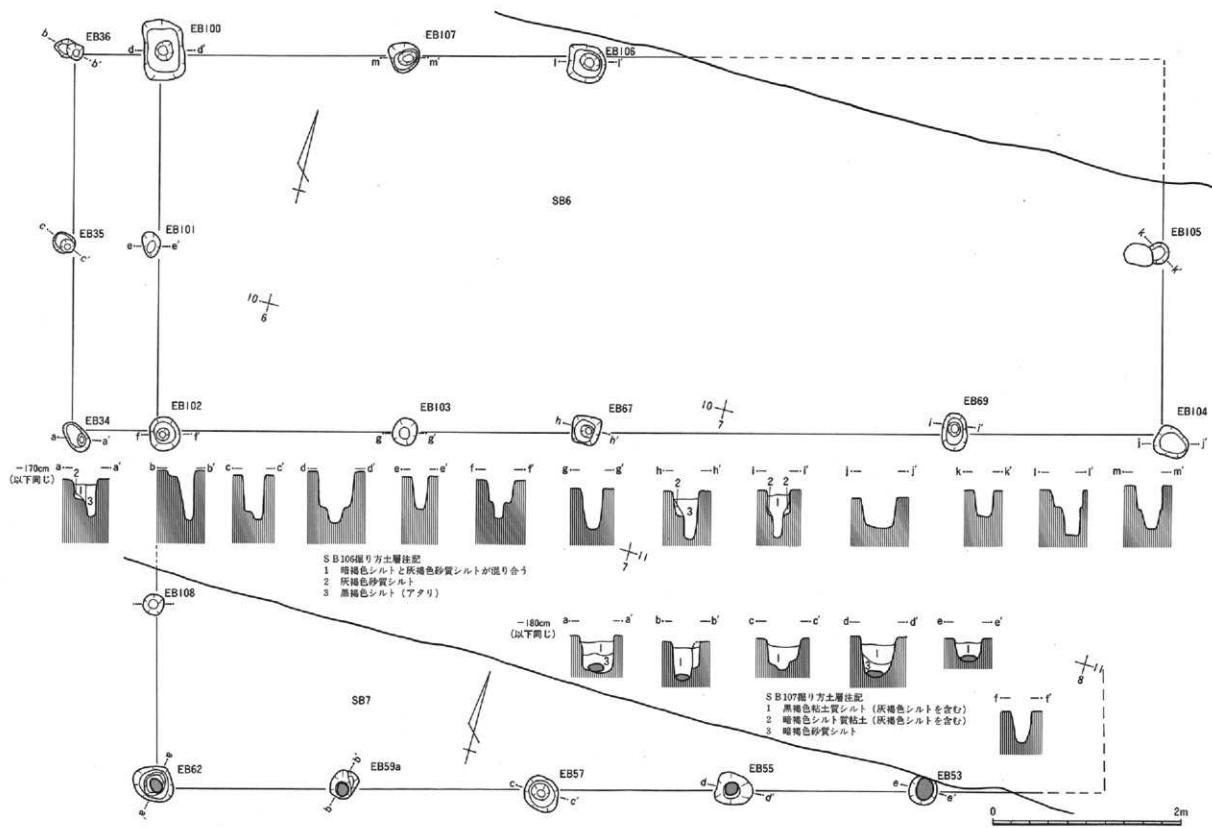
掘り方は径20~40cmの不整円形で、確認面からの深さは25~44cmを測る。6基の掘り方のうちE B 62、59a、55、53の4基の掘り方の底面から長径15~23cm、厚さ5~8cmの橢円形の扁平石が検出された。柱をのせた礎石と考えられる。

E B 57から摩滅の著しい土師器甕の体部と底部の破片が各1点出土しているが、中世の遺物は出土していない。

S B 8 (第10図 図版9~10)

第1調査区の5・6~9・10区で検出した、2間×2間の南北に長い小規模な建物跡で、主軸方向はN-11°-WとS B 6と一致する。建物の大きさは東西3m、南北4.2mで、S B 6、7、9の各掘立柱建物跡と重複しE B 59bがE B 59aに切られていることから、S B 7よりは新しいが、他の建物との新旧関係は明かではない。

柱間距離は、E B 37・39間が160cm、E B 39・41間が140cm、E B 41・66間が210cm、E B 66・59b間が210cm、E B 59b・61間が150cm、E B 61・63間が150cm、E B 63・64間が210cm、E B 64・37間が210cmとなっている。



第9図 SB6・7平面・断面図

掘り方は、小さいものは径20cm程度の不整円形のプランとなり、大きなものは44×53cmで隅丸方形のプランをもつ。深さは27~53cmであるが、深くしっかりしたものが多い。

E B37とE B63は柱根を伴う。E B37は残存部の直径12cm、E B63は8cmを測る。また、E B41の底面には礎石とみられる扁平石がやや傾いて配置されていた。

E B41から土師器甕の摩滅した体部破片が出土しているだけで、他の遺物はない。

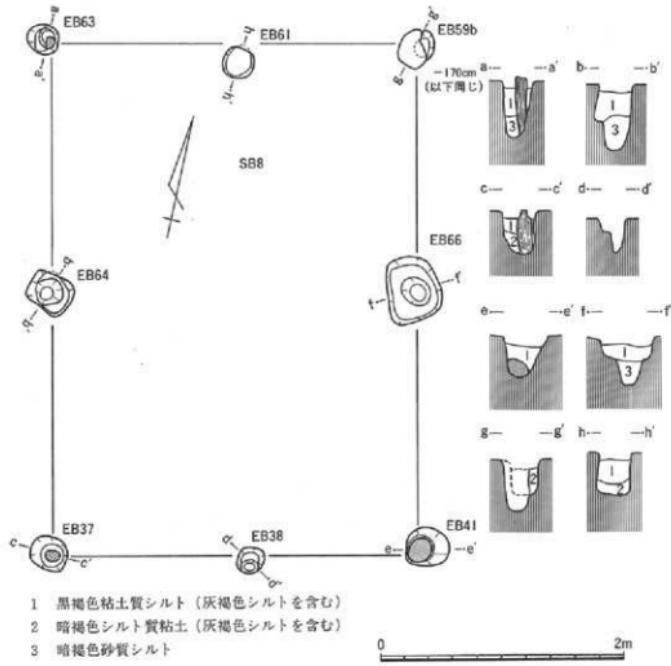
S B 9 (第11図 図版10・11)

第1調査区の6・7-9・10で検出した。2間×2間のやや南北に長い建物跡である。主軸方向はN-12°-WでS B 7と一致する。大きさは東西4m、南北4.2mのやや南北に長い建物で、S B 6、7、8の建物跡と重複するが掘り方の切り合はない。

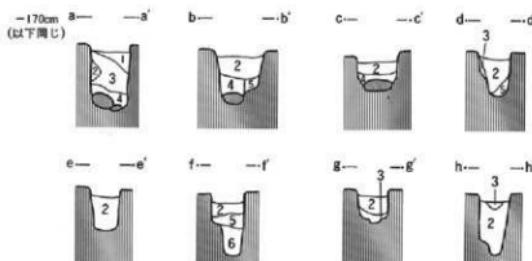
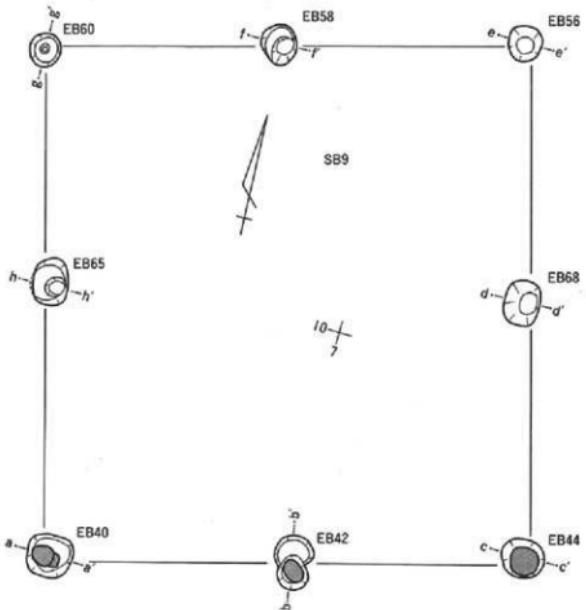
柱間距離はE B40・42間が200cm、E B42・44間が200cm、E B44・68間が210cm、E B68・56間が210cm、E B56・58間が200cm、E B58・60間が200cm、E B60・65間が195cm、E B65・40間が225cmとなっている。

掘り方は径25~30cmの不整円形か、1辺30~40cmの隅丸方形を呈し、深さは27~53cmとバラツキがある。このうち、南面の掘り方列の底面で礎石とみられる扁平石が検出されている。

E B58から須恵器甕の体部破片が出土した。



第10図 SB8平面・断面図



1 灰褐色粘土質シルト（暗褐色粘土質シルトのブロックを含む）

2 黒褐色粘土質シルト（灰褐色シルトを含む）

3 灰褐色シルト質粘土（灰褐色シルトを含む）

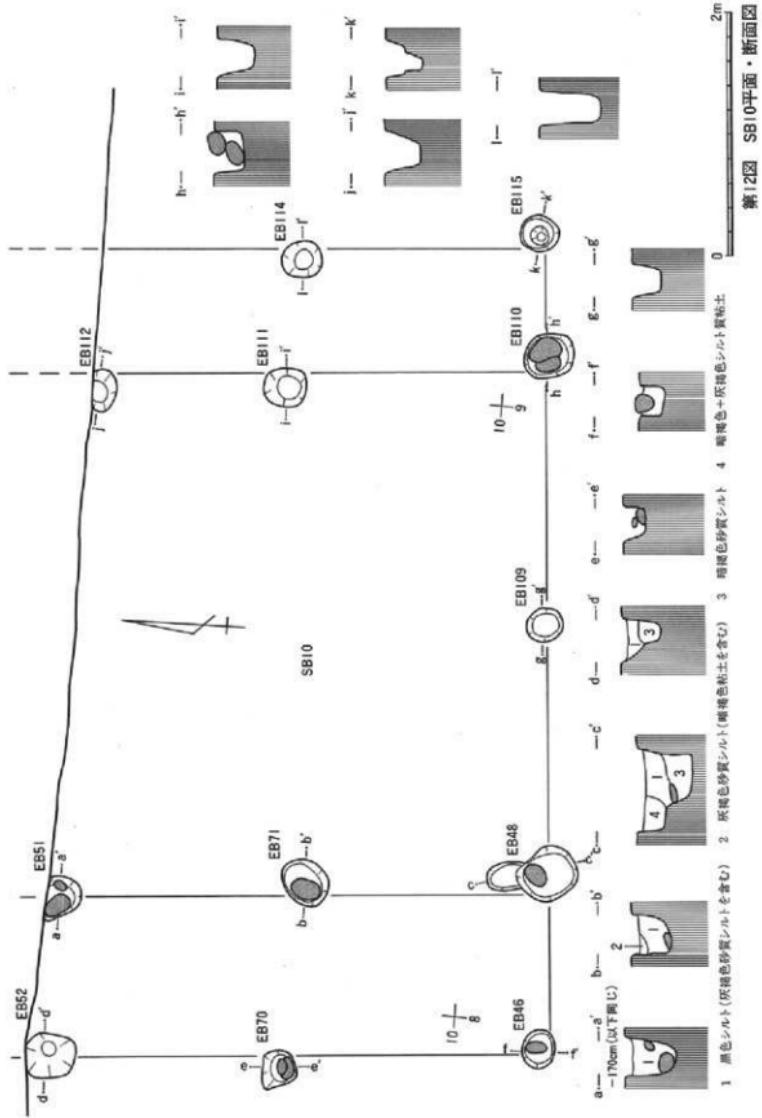
4 暗褐色砂質シルト

5 灰青灰色粘土質シルト

6 黑褐色シルト質粘土



第II図 SB9平面・断面図



S B 10 (第12、17図 図版11・12、16)

第1調査区の7~9-10・11区で検出した。桁行2間以上、梁行2間の東西に廂をもつ南北棟である。主軸方向はN-4°-Wを測り、東西6.5m、南北4m以上の規模をもつ。

S B 6、11と重複し、S B 7とも重複する可能性があるが、これらの前後関係は明かではない。

柱間距離はE B 51・71間が200cm、E B 71・48間が200cm、E B 48・109間が210cm、E B 109・110間が210cm、E B 110・111間が210cm、E B 111・112間が160cm、E B 52・70間が190cm、E B 70・46間が130cm、E B 113・114間が200cmを測る。西面の廂は身舎の西面掘り方列から130cmの位置にあり、東面の廂は身舎から100cm離れた位置にある。

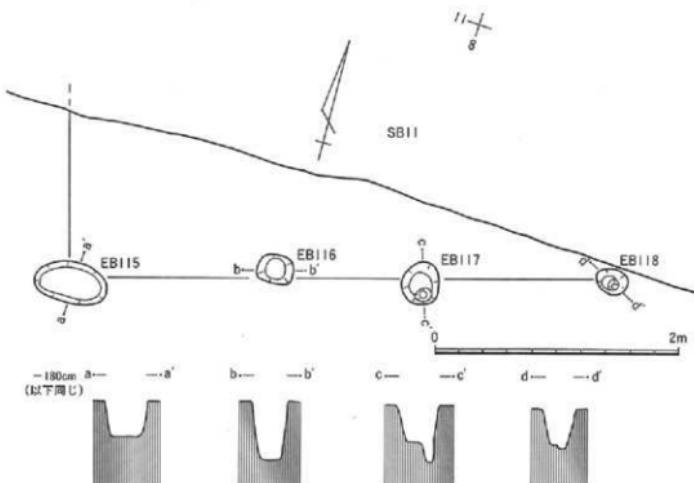
掘り方は一辺もしくは径が30~50cmの隅丸方形や円形のプランをもち、確認面からの深さは浅いもので20cm、深いもので52cmを測るが全体的にバラツキが大きい。E B 51、71、70、46、110の各掘り方で底面に扁平石が検出された。

E B 70から中世の外面にボタン状の貼付けをもつ内耳鍋の体部破片が出土した。(第17図9)。

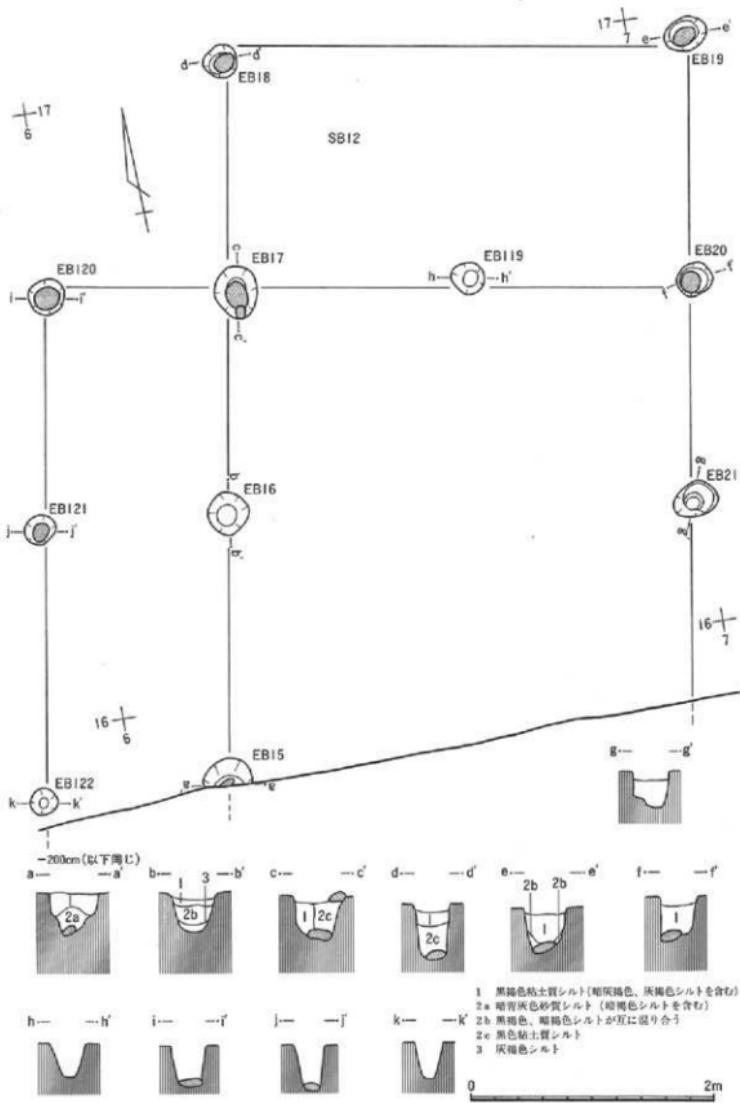
S B 11 (第13図)

第1調査区の7・8-10区で南面掘り方列を確認した建物跡で、東西棟となることは間違いないが、規模は不明である。主軸方向はN-14°-Wとなり、S B 6、7、10と重複する。

柱間距離はE B 115・116間で170cm、E B 116・117間で120cm、E B 117・118間で150cmを測る。掘り方の平面形、規模、深さともバラツキがある。遺物の出土はない。



第13図 S B 11 平面・断面図



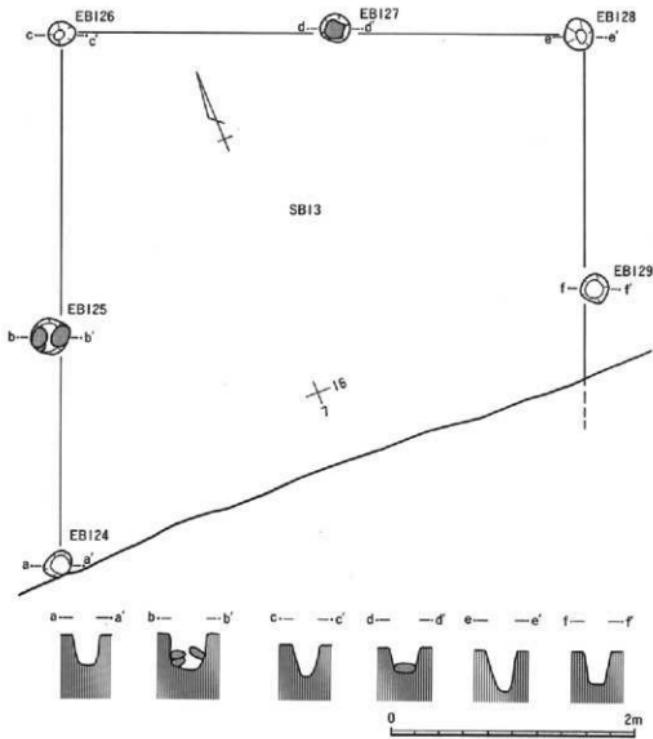
S B12 (第14図 図版12・13)

第2調査区の5~7-15~17区で検出した、桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物跡跡で北と西に席をもつ。建物は南部で調査区外へと延びている。主軸はN-10°-Eとなっており、S B13と重複しているが、前後関係は不明である。

柱間距離はEB15・16間が210cm、EB16・17間が180cm、EB17・117間が200cm、EB119・20間が180cm、EB20・21間が180cm、EB120・121間が190cm、EB121・122間が220cm、EB17・18間が180cm、EB19・20間が200cmを測る。西面の席は身舎の西面掘り方列から150cmの位置にある。

掘り方は径20~40cm前後の不整円形のプランをもち、深さは30~45cmを測る。EB15、17、18、19、20、120、121の各掘り方の底面で扁平石が検出された。

掘り方から遺物は出土していない。



第15図 SB13平面・断面図

S B13 (第15図)

第2調査区の6・7-16・17区で検出した、桁行2間以上、梁行2間の南北棟の建物跡である。S B12と重複している。主軸はN-22°-Eを測り、東西4.3m、南北4.4m以上の規模をもつ。

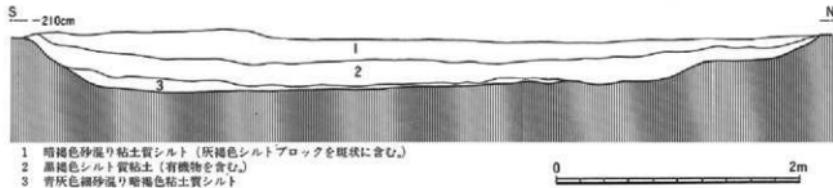
柱間距離はE B124・125間が200cm、E B125・126間が240cm、E B126・127間が220cm、E B127・128間が200cm、E B128・129間が200cmとなっている。

掘り方は径20~30cmの不整円形で、深さは20~34cmと比較的浅い。E B127の底面で扁平石が検出された。遺物の出土はない。

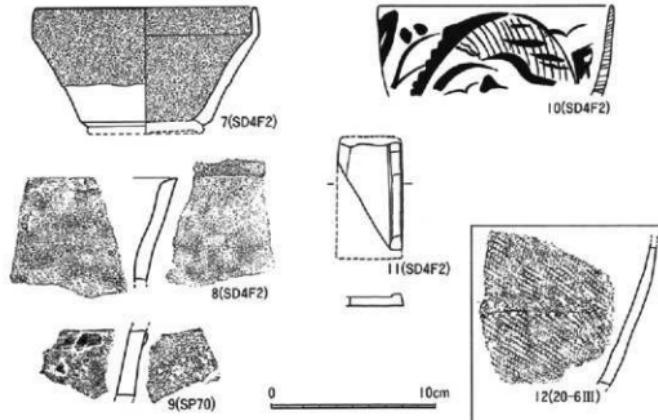
(2) ピット (第4・5図 図版14)

第1、2調査区の双方で組合せが不可能な多くのピットが検出されている。これらには奈良・平安時代のものと考えられる第1調査区S P31~33も確かに存在するが、堆積土は中世の掘立柱建物跡の掘り方に類似するものが圧倒的に多い。

これらのなかには、底面に扁平石を持つもの(S P23等)や、柱根の残るもの(S P73)も存在する。S P27には石臼の破損したものが埋められていた。



第16図 SD4断面図



第17図 中世の遺物、縄文土器

(3)溝跡(第5、16・17図 図版15・16)

第2調査区の4~8-19~21区で検出されたS D 4は、中世集落の北側を限る大溝である。幅4.5~6.5m、確認面からの深さは東部で5cm、西部では部分的に50cmを越え、底面は東から西に傾斜している。堆積土は3層に分けられ、底面に近いF 2・3から古代と中世の遺物が出土した。

第17図7は口径135mm、推定で底径70mm、器高72mmの天目茶碗である。直線状に立ち上がって体部上半で「く」の字上に折れ曲がって口縁が直立している。外面の上半部と内面に鉄釉が施されている。

8は内耳鍋の口縁部資料である。口縁部は外反し、口唇部と鋭角をなしている。内耳鍋はこの他にも底部破片の出土がある。

10は口径142mmの漆器碗である。口縁部がほぼ直立し、上半部の約2分の1が残存している。内外面とも黒漆が塗られ外面には朱漆で草花が描かれている。

11は小形の硯で海の先端部が折損している。

図版16の13は小形の曲物底部である。木製品は板状のものと用途不明のものが出土している(図版15)。

また、中世の遺物に混じて糸切り痕をもつ須恵器壺の底部破片や須恵器壺の体部破片が出土した。

(4)縄文時代の遺物

第2調査区で原位置を失っていると考えられる縄文時代の遺物が基本層位のIII層から出土した。内訳は土器片54点、剝片1点である。文様が施された土器はないが地文の状況から晩期の所産とみられる。

表-1 出土遺物一覧表

種別	器種	部位	S T 2		S T 3		SD 4		SK 3		SP 7		SP 1		SP 2		SP 10		EB 4		EB 6		EB 8		EB 9		SP 2		IK		2K		合計	
			F2	F3	F2	F3	F1	F2	F1	F2	F3	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	
土 瓶 壺	壺	口縁部	3	3			1																										8	
		体部	1	1			6																									1	9	
	甕	底部(ケズリ)	5				5																									10		
		口縁部	2	5	2		1	2	3	1																					16			
須 恵 器	壺	体部	72	42	4	1	11	19	28	11		1								2	3	1	1	1					5	1	43	246		
		底部	1	1	2			1	2			1																				9		
	甕	口縁部								1																					1	2		
		体部																													2	2		
中 世 器	甕	底部(糸切り)								1																				1	2			
		甕									1																			1	3			
	甕	体部	2	1																											3			
		口縁部								1																				1				
中 世 土 器	甕	口縁部								1																					1			
		内 体 部								1																					1			
	内 耳 鍋	体部								1																					2	3		
		底部								1																					1			
木 製 品	曲物	底部								1																					1			
	板									1																					2			
	不明									2																					2			
銅 土 文 様	深鉢	体部																													54	54		
	石器	剝片																													1	1		
その 他の 硯	砥石								1																						1			
	石臼																														1			
	硯									1																					1			
合 計			86	52	9	1	13	34	34	12	10	2	1	1	2	3	1	1	2	1	1	1	5	4	103	379								

VI まとめ

今回の発掘調査は、平成6年度に工事が開始される山形県立米沢工業高等学校移転整備事業に係る緊急発掘調査である。発掘調査は平成6年7月12日から同27日まで実質12日間実施した。調査面積は1,403m²である。その成果と問題点は以下のようにまとめられる。

1 奈良時代、平安時代

本遺跡からは、古代の堅穴住居跡を2棟と数基のピットが発見された。堅穴住居跡からの遺物の出土数は少なかったが、土師器壺は体部下半と底面に回転ヘラケズリが施されるという特徴を持ち、最近の米沢盆地の土師器編年（手塚他1993）で8世紀中葉から末葉に位置づけられているII期の土師器壺との類似性を指摘できる。頸部に浅いス線を持つ土師器の甕も8世紀末の所産として問題はないだろう。また、確実に平安時代に降る土器も出土していないことから、この2棟の堅穴住居が営まれた時期は奈良時代の後半から末葉と考えて良いだろう。

SD4や1区の包含層からは平安時代の所産とみられる底径が小さい回転糸切り痕をもつ須恵器壺も出土しており、ピットは平安時代に降る可能性もある。

奈良時代の集落はおそらく今回検出した住居跡をその東の分布の限界として、さらに西に延びるものと考えることができ、今後、隣接地に計画されている開発との調整が重要な行政課題となる。

2 中世

第1調査区の北部と第2調査区の南部で、中世の掘立柱建物跡8棟と組合せが不明な柱穴群が多數発見された。今回の調査対象とならなかつた両調査区の中間地点が中世集落の中心となることは明白であり、面積1,000m²程度の範囲を持つ中世集落と考えられる。

時期を決定するには、なお、資料不足の感は免れないが、SD4から出土した天目茶碗は井上喜久男氏によって16世紀の第2四半期に位置づけられている「大窯IIa期」（井上1992）に最も近いと判断される。また、手塚 孝氏の御教示によると内耳鏡で口唇部が鋭角に内傾する形となるもの（第17図8）は15世紀の末葉に特徴的な手法との指摘もある。掘立柱建物跡は4時期以上の重複があるため、存続期間も長期に渡っていた可能性もあり、本稿では15世紀後半から16世紀前半に営まれた集落と捉えておく。

掘立柱建物の掘り方底面に偏平な石を配置するという建築手法を持つことも、極めて特徴的なことで、こういった手法を持つ掘立柱建物は藤島城跡SB6建物跡（伊藤・布施1990）に類例が知られる程度である。藤島城のSB6の編年的位置づけは奇しくも15世紀後半から16世紀前半とされ、こういった建築手法が時期的に特定できるものかどうか、今後類例調査を急ぐ必要がある。

何れにしても、本遺跡は伊達治世の時期の集落であるが、地元に全く伝承がないことは、当地域に残された多くの中世城館址と共通性があり、断絶の大きさを物語っている。

参考文献（年代順）

- 手塚 孝他(1975)：「米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第1集」
 手塚 孝他(1976)：「米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第2集」
 手塚 孝他(1977)：「米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第3集」
 手塚 孝(1985)：「米沢の古代文化」 まんぎり会
 手塚 孝他(1988)：「丘丘尼平道跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第21集
 伊藤邦弘・布施明子(1990)：「藤島城跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
 米沢市教育委員会(1991)：「遺跡詳細分析調査報告書第4集」米沢市埋蔵文化財調査報告書第28集
 井上喜久男(1992)：「尾張陶磁」 ニーザイエンス社
 手塚 孝他(1993)：「大浦B遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集
 山形県教育委員会(1994)：「分布調査報告書(21)」山形県埋蔵文化財調査報告書第194集

報告書抄録

ふりがな	かみやち いせきほくつちょうきほうこくしょ							
書名	上谷地C遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	渋谷孝雄							
編集機関	山形県教育庁文化財課							
所在地	〒990-70 山形県山形市松波1丁目8番1号 TEL 0236-30-2880							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみやち 上谷地	山形県米沢市 大学上谷地 2030他	6202	平成6年 度登録	37度 54分 40秒	140度 08分 48秒	19940712～ 19940727	1,403	山形県立米沢 工業高等学校 移転整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上谷地C	集落跡	奈良時代	壁穴式住居跡	2棟 1基	土器 2点			
		室町時代	掘立柱建物跡	8棟 溝跡 その他 柱穴等	天目茶碗 1点 内耳鏡 3点 漆器 1点			

図 版



第1調査区調査状況 南東



第2調査区調査前状況 北東



ST2完掘（北から）



ST3完掘（北から）



ST2・3検出状況（西から）



ST2検出状況（南から）



ST3検出状況（南から）



ST2・3セクションベルト設置（東から）



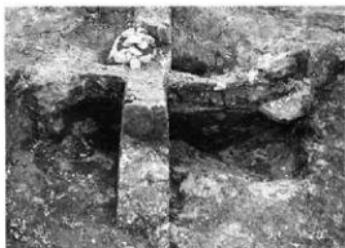
ST2・3精査状況（南東から）



ST2土層断面（南から）



ST2土層断面（東から）



ST2カマド断面（北から）



ST3土層断面（南から）



ST3土層断面（西から）



ST3カマド断面（北から）



ST2床面検出状況（北から）



ST3床面検出状況（北から）



ST3カマド全景（北から）



ST2・EKI・EP3土層断面（南から）



ST3・EKI・2土層断面（南西から）



ST2・3完掘（西から）



ST2・3完掘（東から）



第Ⅰ調査区中世柱穴群（東北東から）



第Ⅰ調査区中世柱穴群（西南西から）



第2調査区中世柱穴群（南から）



第2調査区中世柱穴群（西から）



SB6・EB34 土層断面 (南から)



SB6・EB35 完掘 (南から)



SB6・EB36 完掘 (西から)



SB6・EB67 土層断面 (南から)



SB6・EB69 土層断面 (南から)



SB7・EB53 完掘 (南から)



SB7・EB55 土層断面 (南から)



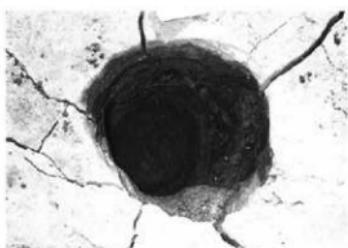
SB7・EB55 完掘 (北から)



SB7・EB57土層断面 (南から)



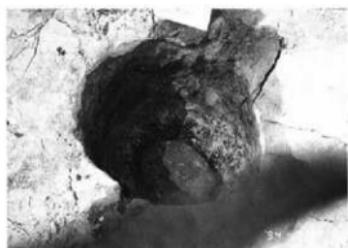
SB7・EB59土層断面 (南東から)



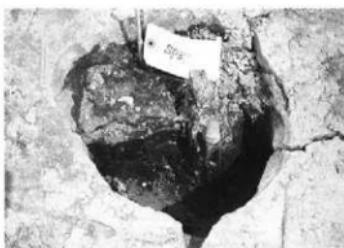
SB7・EB59完掘 (東から)



SB7・EB62土層断面 (西から)



SB7・EB62完掘 (東から)



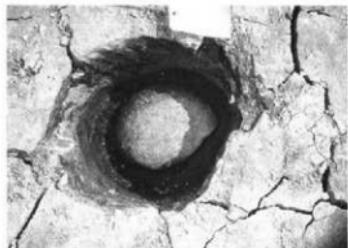
SB8・EB37土層断面 (南から)



SB8・EB39土層断面 (西から)



SB8・EB41土層断面 (南から)



SB8・EB41発掘（西から）



SB8・EB66土層断面（南から）



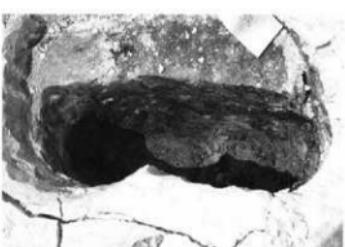
SB8・EB63土層断面（西から）



SB8・EB64土層断面（西から）



SB9・EB40土層断面（南から）



SB9・EB42土層断面（東から）



SB9・EB42発掘（北から）



SB9・EB44土層断面（南から）



SB9・EB44完堀（南から）



SB9・EB68土層断面（南から）



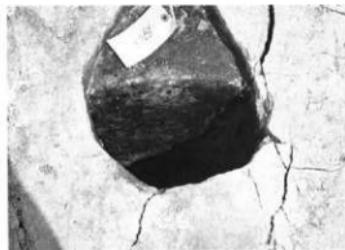
SB9・EB56土層断面（南から）



SB9・EB58土層断面（南から）



SB9・EB60土層断面（西から）



SB9・EB65土層断面（南から）



SB10・EB51土層断面（南から）



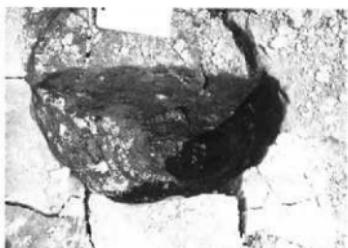
SB10・EB71土層断面（南から）



SB10・EB48土層断面（西から）



SB10・EB48完掘（東から）



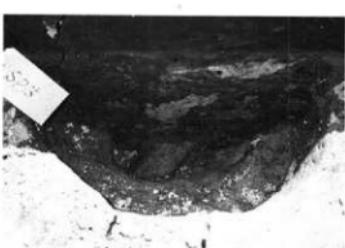
SB10・EB52土層断面（南から）



SB10・EB70土層断面（西から）



SB10・EB46土層断面（西から）



SB12・EB15土層断面（北から）



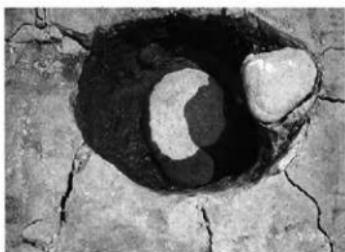
SB12・EB15完掘（北から）



SB12・EB16土層断面（西から）



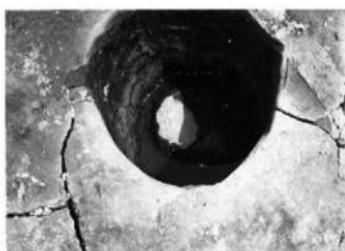
SB12・EB17土層断面（西から）



SB12・EB17完掘（西から）



SB12・EB18土層断面（南から）



SB12・EB18完掘（西から）



SB12・EB19土層断面（南から）



SB12・EB19完掘（西から）



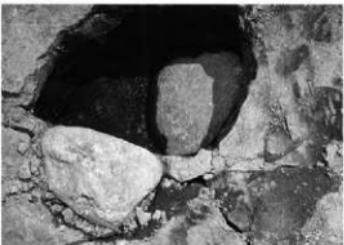
SB12・EB20土層断面（南から）



SB12・EB20完掘（西から）



SP22完掘（北から）



SP23完掘（北から）



SP25完掘（西から）



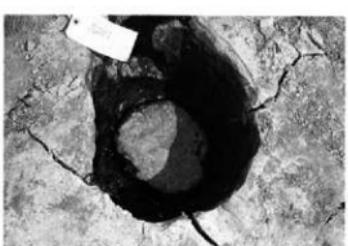
SP27石臼出土状況（東から）



SP38完掘（西から）



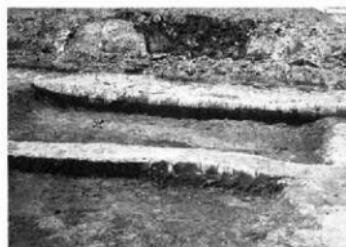
SP43完掘（北から）



SP45完掘（西から）



SP47完掘（西から）



SD4土層断面（東から）



SD4発掘（東から）



SD4板状木製品出土状況（西から）



SD4木製品出土状況（北西から）



SD4曲物底部出土状況（南から）



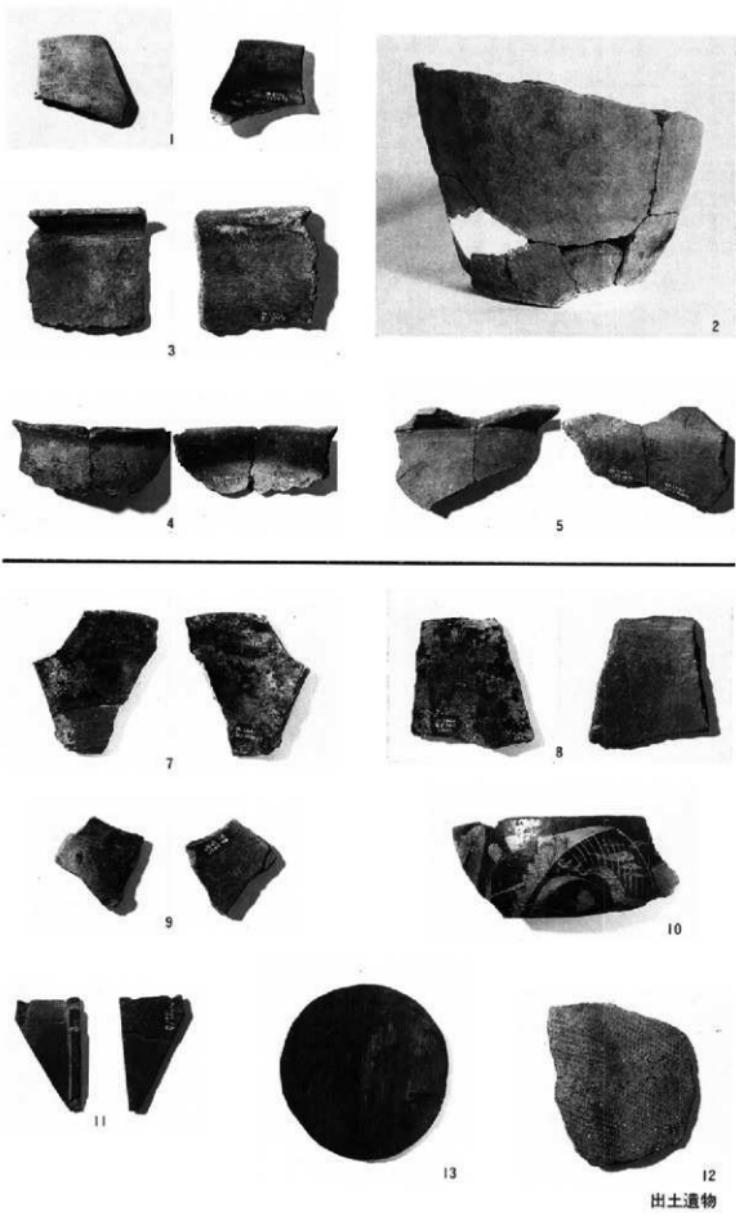
SD4漆器出土状況（南から）



基本層序①（南から）



基本層序②（東から）



出土遺物

山形県埋蔵文化財調査報告書196集

上谷地C遺跡発掘調査報告書

平成7年3月24日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 山形印刷株式会社
